

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部2年 松本希良梨

私がフィリピン研修に参加した目的は、日ごろ学習支援で交流している JFC のルーツを理解することであった。特に、日本への移民がどのように送り出されているのか、彼らはどのような心境にあるのかを知ることが個人的な課題であった。本プログラムでは、日本語学校や CFO、障がい者施設など様々な場所を訪問し、移民問題を多角的に捉えるいい機会となった。また、フィリピン人女性を日本へ送り出していた斡旋業者やプロモーター、日本でフィリピン人労働者を受け入れる介護施設の経営者、そして実際にこれから日本に住むことになるフィリピン人女性たち、エンターテイナーとして働く女性など様々な立場の方々に話を聞かせていただくという貴重な機会を設けていただき、非常に有意義な経験となった。一つの事実でも、立場によってその捉え方が異なるということが実感できた。

特に印象的だったのは、結婚移民の女性たちだ。日本人男性とフィリピン人女性の間の国際結婚では、離婚率が非常に高く、偽装結婚も多い。日本で貧困生活を強いられる女性も多くいる。このような事前知識から、結婚してこれから日本へ行く女性たちはどのような人たちで、どんな心境であるのだろうかと疑問だった。CFO で彼女たちと話をすると、予想とは違い、幸せそうな写真を何枚も見せてくれて、私は彼を愛しているし彼も私を愛していると嬉しそうに話をしてくれた。私は正直、偽装結婚や年の差結婚などの話を聞いていたため、もっと胡散臭い恋愛を彼女たちがしていると思っていた。しかし、彼女たちはいたって「普通」で、年の差もコミュニケーションが取れたら関係ないと口を揃えて話していた。私はこのことに驚くとともに、実際に話すことによって今まで結婚移民という概念だけによって捉えていた存在を、一人の人間として捉えられるようになり、より彼女たちに寄り添って移民問題について考えられるようになった。このような経験は、フィリピン研修に参加してこそ得られるものであった。

今回の研修は、フィリピン人と話をする機会が多かったため、その国民性にも触れることができた。彼らは過去のことは振り返らず、弱音を吐かない人たちだった。エンターテイナーとして日本で働いていた女性や、現在フィリピンでエンターテイナーとして働いている女性に仕事で辛かったことを尋ねても、「ない」と答える。しかし、一緒に研修に参加しており、日本で母語支援員として JFC に携わっている木之本先生は、「彼女たちは我慢をされていて、その姿を見ていると心が痛い」と話し、やはり本音や実情を知るには1回きりの話だけでは不十分で、その対象と長く付き合っていく必要があると痛感した。

私はこの研修を通して現場の声を聞く重要性と面白さを感じた。使用言語が英語ということで、自分の尋ねたいことを正確に伝えられない部分もあり、語学力を磨いてより相手のことを理解できるようになりたいと感じた。そして、JFC との今後のかかわりについては、目的であった JFC のルーツの理解は、まだ一部ではあるが達成できたため、学習支援ではただ勉強を教えたり話を聞いたりするだけではなく、彼らの生活にももっと積極的に触れていきたいと思った。最後に、この研修で結婚移民の女性や JFC、エンターテイナーとして働き日本に住んでいた女性たちにインタビューをしているなかで、私は潜在的にマイノリティにおける家族の在り方について関心を持っているということに気が付くことができ、フィリピン研修での体験を通して視野が広がることによって自己発見の機会にもなった。これからこの経験を活かして自分の学びを深めていきたい。